

教えて『認知症』① ≪ 認知症について ≫

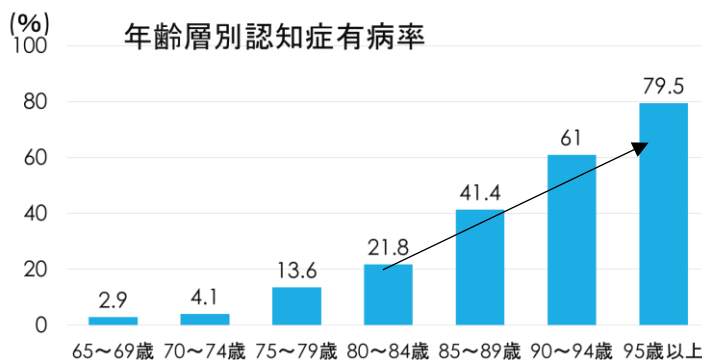
『認知症』とは、神経変性、血管障害、外傷などのいろいろな病気による認知機能（記憶力・見当識・視空間認知・言語能など）の障害・低下のために、仕事や日常生活に支障を来して『生活障害』が生じた状態です。

『認知症』というと、突然怒り出す、徘徊する、排泄の失敗をするなどのイメージをお持ちの方が多いのかもしれませんが、これらの症状は、認知機能の低下に対して間違った対応をとった結果でしかありません。そのため、『認知症』について正しく理解し、適切なサポートを行うことは、本人が安心して機嫌よく生活を送るために必要です。

加齢により身体機能と認知機能は低下しますので、『認知症』は、長生きをすれば皆がその域に入ります。そのときに、適切なサポートをすれば楽しく生活ができます。

長生きをするなら、楽しく長生きしたいと思いませんか。

まずは、早期発見・早期治療が重要です。今までできていたことができなくなったり、几帳面な方が整理や管理が悪くなり、身の整容に気かけない、意欲が低下し出不精になるなど、生活に変化がみられるときは、かかりつけ医の先生にご相談ください。



2013年の厚生労働省研究班の調査結果によると、日本における年齢別の認知症の発症率は、80歳を超えると急に高くなります。認知症は身近な病気です。



出典：厚生労働省科学研究費補助金 認知症対策総合研究事業
「都市部における認知症有病率と認知症の生活障害への対応」総合研究報告

1 いろいろな認知症

(1) アルツハイマー型認知症

認知症の中でも合併症を含めて、60～70%を占めるのが、アルツハイマー型認知症です。

「物忘れ」や「道に迷う」などの症状は、記憶を最初に留める側頭葉内側の「海馬」や視空間を認識する「頭頂連合野」が、先行して障害されることによります。初期には、麻痺や歩行障害などの運動異常はなく、簡単な受け答えも「取り繕い」されて見逃されがちです。しかし、詳しい話に及ぶと間

違いが目立ちます。例えば、「最近の大きなニュースは何ですか？」という問いに、「今日は、忙しくて新聞やテレビを見ていない。」とごまかされたり、時期のずれた話をされたら、アルツハイマー型認知症が疑われます。

(2) 血管性認知症

脳梗塞や脳出血により障害された脳の機能低下により生じます。呂律が回りにくかったり、運動麻痺などの身体症状を伴っていることが、多く見られます。しかし、生活習慣病をしっかりと管理することで、予防・悪化防止が可能です。

(3) レビー小体型認知症

レビー小体という特殊なたんぱく質が、脳の脳皮質や脳幹部に生じ、その影響で脳神経細胞が破壊され生じる認知症です。

手足の震えや身体が硬く、動きが少なく、バランスが悪くなる「パーキンソン症状」を伴うことが多いです。立ち眩みや物の見間違い（錯視）、幻覚が見えたりすることもあります。

(4) 前頭側頭型認知症

前頭葉や側頭葉が萎縮して起こる認知症です。行動の異常や人格の変化、言語障害がみられます。比較的若年の方に生じ、非社会的行動を起こす場合もあります。それに伴い会社を解雇される例もありますので、早期に診断が必要です。

2 『加齢に伴う物忘れ』と『認知症による物忘れ』のちがい

加齢により、誰もが認知機能は低下します。加齢に伴う物忘れと、認知症による物忘れの違いについて代表的なものは、下記のとおりです。

加齢に伴う物忘れ	認知症による物忘れ
<ul style="list-style-type: none">• 物忘れを自覚している• 体験したことの一部を忘れる• ヒントがあれば思い出す• 日常生活に支障はない• 判断力は低下しない	<ul style="list-style-type: none">• 物忘れの自覚がない• 体験したこと自体を忘れる• ヒントがあっても思い出せない• 日常生活に支障がある• 判断力が低下する